

さくらクォーターリー・レビュー The Sakura Quarterly Review

順天堂大学さくらキャンパス図書新聞

創刊号!

Volume 1. Autumn 2019

BOOK REVIEW

～ 読書の自由 ～

『子どもが「読書」に夢中になる魔法の授業』

Donalyn Miller著、高橋璃子訳

かんき出版 2015年

この図書新聞では、学生の読書のきっかけとなるような書評を募集しているそうである。そこで、この書評企画のねらいに関係しそうな一冊を紹介したい。

本書は、アメリカの小学校の国語教師である著者が、子どもたちを読書好きにさせてきた経験をまとめたものである。具体的な授業方法よりも、読書好きにさせるための考え方やルールが丁寧に語られている。著者の対象は子どもたちであるが、本を読まない大人にも参考になる点が多く、例えば、読書の「自由」に関する指摘は、読書に対する心のハードルを下げてくれるだろう。日々読み続けるという訓練が読書好きへの変貌の根底にあるものの、子どもたちは授業での読書を訓練としては認識していないように思う。それは、生徒それぞれの知への欲求に応じて、自発的に自由を選んで読むことから始めているからであろう。

読書を苦手とする学生は、本書で述べられているような読書の自由に気づくことから始めてみてはどうだろうか。

(木藤 友規)



『SHOE DOG シュードッグ』

フィル・ナイト 著、大田黒 奉之 訳

東洋経済新報社、2017年

SHOE DOG。日本語に訳すと靴の製造や販売、購入など靴に魅了され人生をも捧げる人間のことを指す。言い方を変えれば靴バカとも言える。そうなると、アルバイトで靴を売り、その給料で自分の靴を買うことが生きているの私自身も捉えようによってはSHOE DOGの1人だ。

世界的スポーツブランド、NIKE。本書はその創設者であるフィルナイトの著書である。

フィルナイトの生い立ちや初期から現在のNIKEの構造、様々な苦境などが記されている。決して明るい話題ばかりではないが赤裸々に明かされるNIKEの真実を目にするチャンスだ。

NIKEはアスリートがそうするように、スティックにスピードを重視する企業。既に完成されつつあるスポーツ用品業界の中たった3、40年でこれだけの規模の会社を作り上げた人間はそういない。たかがスポーツブランドという先入観を捨て、NIKEにあまり興味がない方にも是非手に取って頂きたい。

本書のなかには現在のNIKEに浸透している文化、言葉が散りばめられている。私は順大の中でNIKEに対する愛は誰にも負けない絶対的な自信がある。本書のより詳しい解説はお声がけ下さい。

私はNIKEの商品を身につけている方は他大学より順大は多いと感じる。そんな方は本書を読むことでNIKEの商品が好きになるから、NIKEのブランドが好きになるに進化するだろう。

(健康学科3年 飯泉 創)



『居酒屋ぼったくり 1~11』
秋川 滝美 著
アルファポリス 2012~19年

『ぼったくり』という看板を掲げた居酒屋に一見の客は入れますか？

この物語は東京下町を舞台に繰り広げられる、人の温かみを感じられるお話です。

『ぼったくり』という屋号は、主人公である美音と妹の父親が、「誰でも買えるような酒や、どこの家庭でも出てくるような料理で金を取るうちの店は、もうそれだけでぼったくりだ」という言葉を常連たちに常に呟くから、もういっそ店名から『ぼったくり』にしてしまえと常連たちでお金を出し合って新しい暖簾を送ったことによりその名になりました。

物語は料理、お酒、人間関係を中心に繰り広げられていきますが、描写がとても細かく分かりやすいので読んでいるとお腹が空いてくること多くあります。

さらに『ぼったくり』の店主である美音は聞き上手なお人好しのため、商店街や家族、恋人同士などの様々な問題に巻き込まれます

料理も普段家で食べられるような家庭料理から、一風変わった斬新な料理、さらに郷土料理まで多岐に渡ります。お酒は店主である美音がとてもこだわっているため、酒蔵にわざわざ足を運んで買ってきているものからコンビニでも買えるようなものまであります。

なぜこの本を好きなのか考えたところ、空気感が好きなのではないか、と思いました。

店を営んでいる美音、馨と常連の人達がいる店内は、悩みがあれば全員で話を聞き、全員であーでもないこーでもないと言いながら全員で話し合っ

て解決策を考える。そんな義理人情に溢れた店を私は知りません。喧嘩をしても美味しいお酒と料理の前では仲直りせざるをえません。そして美音も常連達のおみや出身地を考慮してメニューを組み立てています。鰯を主食に出すとしても塩焼きと照り焼きのどちらかを選べるようにして、常連達が食べたいと思えるような料理を提供することで店をよい空気感にするために影響を及ぼしているのではないかと思います。

信頼できる人が近くにいることの心強さ、一人で生活していると忘れかけてしまう人とご飯を食べることの楽しさ、そしてほっと息をつけるような美味しい料理とお酒。これら全てを『ぼったくり』は与えてくれます。誰もが近くに欲しいと思うでしょう。

(スポーツ科学科 2年 鈴木なぎさ)



「オススメの本教えてください！」 第1回

山田 泰行 先生
インタビュアー：マネジメント学科3年 石田 寿幸

「無能の人」『無能の人、日の戯れ』収録
つげ義春 著
新潮社 1998年

石田：あらすじについて教えてください。

山田：河原で一見何の変哲も無い「石」を売る人の姿を描いた物語です。ただの石ころに商品としての付加価値をつけ差別化するため、趣のある名前をつけたりします。雲、風、霊のように。石を売る側と買う側の価値観の違いや、その差異を表現した描写が興味深いです。「価値」とは果たして何なのだろうか。

石田：ただの石と、そうでは無い石。その価値の差別化について作中の描写も興味深いです。先生はこの設定をどのように解釈されていますか。

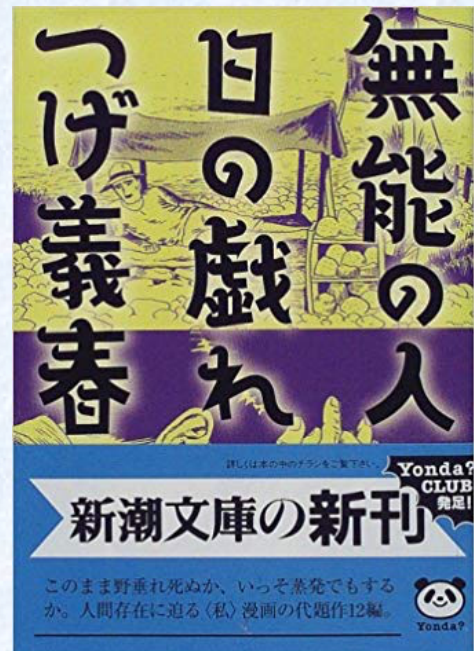
山田：例えば「大学講義の未来が描かれている」という見方が可能かなど。この作品の主人公は、河原の石と商品の石をどのように差別化して価値を付加するかで悩んでいるけれども、大学で講義している自分も同じだと思えます。第四次産業革命（タブレットやインターネットの台頭）によって誰でも高度な科学情報にアクセスできる時代です。「河原に落ちている石ころ」のように転がっている情報からどのような情報を選択し、どのように差別化して教育の場に持ち込めばよいのか？といったことを考えさせられます。どの情報を組み合わせ、どのように伝え、社会で活用できるレベルに持っていきかにかに教員の存在価値があり、試されていると考えることもできます。突き詰めると、果たして10年後に大学教員という仕事は存在するのか。その問いのヒントが、この作品に潜んでいるかもしれません。

石田：第四次産業革命の到来によって、情報が石ころのように落ちている

時代がやってきた。その状況で、先生たちが授業で学生に伝えなくてもインターネットで学生はあらゆる情報にアクセスできてしまうと。

山田：教員が提供する「商品」としての情報が検索すればゴロゴロと、河原の石のように落ちている時代になったと考えると、教員はどのように価値をつけていくべきなのか。例えば「そこらへんに」落ちているデータや理論などの科学情報を、目的に応じて取捨選択し、この理論を用いればこんなことが可能になるといった「使い方」を提案するとか。そういう付加価値を示すことが教員の果たす役割かもしれないと思ったりします。

石田：興味深い本を紹介してくださり、ありがとうございました。



FILM REVIEW

『シャイン』1995年アカデミー賞受賞作品

出演: ジェフリー・ラッシュ 他

監督: スコット・ヒックス

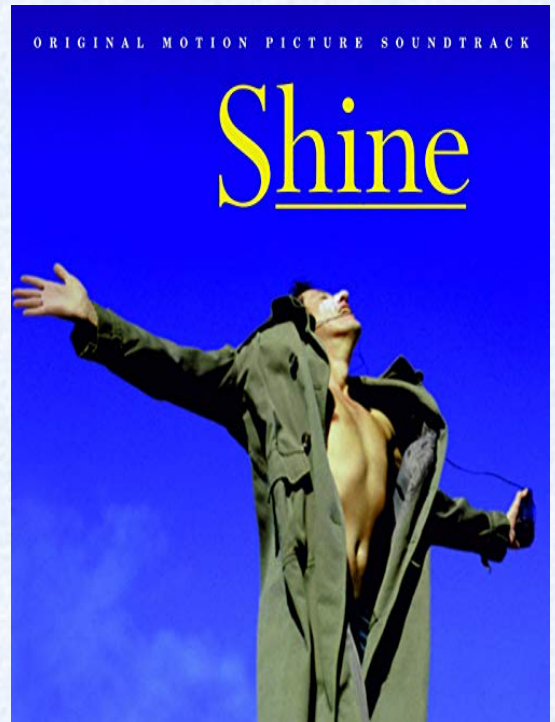
角川書店 (DVD) 2011年

精神疾患を題材とした映画はいくつかありますが、この映画は、精神疾患の中でも統合失調症を発症したひとりのピアニストの人生を描いたものです。精神疾患というと何故か怖いとか危ないといったイメージがあるかも知れませんが1995年のオーストラリアを舞台に描かれたこの映画は、こころほっと温まる映画です。

映画のファーストシーンは統合失調症の支離滅裂(ひとり言)から始まります。主人公デイビットは音楽家になりきれなかった父親から厳しいピアノレッスンを受け、コンテストで優秀な成績を収めアメリカ留学の機会を得ます。しかし、父親は自分の元に置いておきたいとの葛藤に苛まされ、過度に厳格な父親との人間関係に悩みます。デイビットは英国国立音楽学校絵の留学の機会を得て、留学に強く反対する父を振り切り、ひとりイギリスに渡ります。しかし、幼少期からの厳しいしつけと葛藤の中、徐々に精神疾患に蝕まれ、ピアノに没頭、才能を開花する途中で精神的な破綻を迎えます。志半ばにしてオーストラリアの精神科病院に療養します。病院で音楽療法をするベリルや小説家など、デイビットはピアノの才能だけでなく、心優しいまわりの人々にも恵まれ、最後は、占星術士のギリアンと結婚し映画は終わります。

彼がラフマニノフピアノ協奏曲第3番を弾くことは父の願いでした。この映画では最初から最後までデイビットが実際に奏でる素晴らしいピアノを聴くことができます。この映画は、精神疾患を持っていても素晴らしい才能があることで人を魅了することができることを証明した、家族間の愛情溢れる人間関係を描いたとても素敵な映画であると思います。

(四方田 清)



『舟を編む』

出演: 松田龍平、宮崎あおい、オダギリジョー、

黒木華、渡辺美佐子 他

監督: 石井裕也

松竹 2013年

今回は「本」に関係する映画を紹介したい。

あらすじ: 出版社・玄武書房では中型国語辞典『大渡海』の刊行計画を進めていた。営業部員の馬締光也は、定年を間近に控えて後継者を探していた辞書編集部ベテラン編集者・荒木に引き抜かれ、辞書編集部に異動することになる。社内で「金食い虫」と呼ばれる辞書編集部であったが、馬締は言葉への強い執着心と持ち前の粘り強さを生かして、辞書編纂者として才能を発揮してゆく。

引用: <https://ja.m.wikipedia.org/wiki/舟を編む>

この映画を見て、心に残ったことが3つある。

1. 仕事

辞書を一から作ることは地味で細かく、大変な作業で、到底私にはできない。だが、彼らはやり遂げるのである。辞書というイメージは時代遅れだったり、広辞苑や電子辞書などに代わるものはいくらでもあり、ありふれたものであるが、彼らは「今を生きる辞書を作りたい」という強い思いを持って辞書作りに励む。新しい言葉を知るために合コンに参加し、ファーストフード店では女子高生の会話を盗み聞き、街で見かけたり聞いた知らない言葉を即座にメモを取ったりと、彼らの生活も仕事になっているのだ。彼らは日本語をとことん愛して、見つめて、新しい言葉を受け入れ、日本語の発展に力を注いだ。ビジネスではあっても利益を追求するだけではなく、情熱を注げる仕事であれば、自分自身、さらには周りを良い方向へ引っ張っていきけるのだろう。

2. 言葉

情報通信技術の向上により、世の中は情報で溢れ、社会は劇的に変わり、新しい言葉や概念が溢れている。その社会の中で言葉は生まれ、死んでいく。さらには意味が変わる言葉も現れる。私たちはコミュニケーションをとるために言葉を使う。知りたいことがあるから言葉を通して知る。相手を、物事を分かりたいと思うから言葉を使う。言葉というものはなんなのか、今一度考えることができた。

3. ものづくりへの情熱

私たちの身の回りには物で溢れている。舟を編むでは新しい辞書が作られるまでに視点が置かれた物語であるが、もの1つ作るのに多大な時間と、人の力と、知識と、お金がかけられていることを実感した。もの1つ1つにこだわりがあり、製作者の想いが、努力が詰まっている。身近にあるものをもっと大切に扱おうと思えた。

舟を編むは2012年本屋大賞を受賞した三浦しをんさんの作品である。作品自体は、静かに進むがとても熱い映画であり、仕事とは、言葉とは何かについて深く考えさせる映画である。2019年9月現在ではNetflix、Amazonプライム・ビデオで見放題で見ることができる。本校の学生会員になっている人は多いだろう。是非見てほしい作品だ。

(マネジメント学科3年 松下 公美)



— 「家族」の危うさともろさ—

『誰も知らない』

(英題：Nobody knows)

出演：柳楽優弥、北浦愛、木村飛影、清水萌々子 他

監督：是枝裕和

2004年公開

バンダイビジュアル (DVD)

昨春、インド往復の機内で映画「万引き家族」を二度見た。二度も見たのは、英語吹き替え版だったので内容が今ひとつ分からなかったのと、2018年に様々な受賞をした映画だということを知っていたからだ。そして、是枝裕和監督作品だということも。その映画の興味深いところは、大都市で暮らす一つの「家族」が万引きを日常的に繰り返して生活しているという異常さに最初は目を奪われるけれども、実はそこではないことに観ている者は引きずり込まれていくところだ。街中の古びた一軒家に住む夫婦と子どもとおばあちゃんという一見どこにでもある「家族」が、いわゆる普通の家族では無いのだ。虐待を受けた子どもの避難所として機能していたり、夫婦は過去の事件を隠して家族のように暮らしていたり。

家族とは一体何だろう？ 血縁関係があって、一緒に生活をしている者だけが家族なのか。なぜその家族の成員は助け合い、迷惑を互いにかけて合い融通し合いながら生活を共にするのか？ またはそうしなければいけないのか？ 「家族は愛し合い、助け合わなくてははいけない」なんて、架空のフィクションではないのか？ 是枝監督のその映画に込めた問いは何なのだろう？ それを考えるうち、随分と昔に観た一つの同監督作品を思い出し、もう一度観た。映画「誰も知らない」である。

映画「誰も知らない」は2004年公開の是枝監督作品である。私は40代になったばかり、順天堂に勤めだしてから数年目の駆け出しの頃、レンタルDVDで観たのではなかったか。賃貸マンションに母親と小学校高学年ぐらいの少年が引っ越してくるところから映画は始まる。でも実は子どもは引っ越し荷物のスーツケースの中にあと二人、暗くなって駅まで迎えに行った子が一人、計4人いた。最初はマンションの他の住民に覚られないよう、部屋の中で静かに暮らすことを求められる。母親は当初から子どもをその部屋に置いて長期間帰ってこない。多分、男性との交際に夢中になり（その様子はその交際に一縷の望みをかけていると言えば聞こえは良いが、男性とか自分を守ってくれる者へのアディクションだろう）、子どもの世話を放棄していく。「クリスマスには帰るからね」の約束のはずが、やがて季節は桜の季節を過ぎ、夏になり、電気も水道も止められた部屋から子ども達は公園や地域に飛び出していく。

この映画は実際に東京であった事例を元にしたそうだ。簡単にネグレク

トとか養育の放棄、いわゆる児童虐待のひどさを啓発する映画だと説明してしまったり、それは余りに形式的に過ぎる。私は、この映画でも是枝監督は「家族とは何か」「そのつながりの根っこは何か」と問いかけているように思える。幼い兄弟だけで暮らす日々の中でも、兄弟は様々な人間と関わりを持つ。コンビニの店員、同じマンションの住人、複数いる「元」父親、不登校のため公園で時間を潰している女子高生、同世代の友人。だが誰も少しずつの助けはしてくれるが、根本的な援助・手出しはしてくれない。それは、「家族」の問題は、とても私的な事柄であり、「家族」のことだから。大都市の街角で、纏えた匂いのするボロボロのTシャツを着ている少年がバケツで水を家に運んでいても、我々は特にそれを気にも止めないであろう。そういう、私も含めてバラバラにされている現代の都市生活者の感性を、「万引き家族」の中にも見いだしたからこそ、この夏、もう一度「誰も知らない」を再度観ようと思い立ったのだ。子どものけなげさ、無力さ、親の身勝手さ、そして大都市の人間のつながりの希薄さ。この子たちは全く学校に行っていなかった。人間が学ぶのは、学校へ行くのは、まさに人と繋がるすべを獲得するためだと改めて考えた。

(牛尾 直行)



Volume 1. 編集部スタッフ:

石田寿幸(インタビュー)
松下公美(紙面デザイン)
宮原凪沙(紙面デザイン)

編集後記: 創刊号ということで、どのような誌面になるのか手探りの中、ご寄稿くださった皆様、本当に有難うございました。学術メディアセンターご協力のもと、本や映画を中心に文化系の情報を積極的に発信していきたいと思えます。次は冬の号になります。ご意見や要望などぜひお寄せください。

(庄子ひとみ)

学術メディアセンターからのお知らせ

創刊おめでとうございます。
今回ご紹介されている図書のうち『居酒屋ぼったくり』と『舟を編む』は、さくらで所蔵しております。ぜひ手に取ってみてください。
また、英語版SLAM DUNKを購入しました。英語の学習等にご活用ください。

原稿募集!

おすすめの本や映画をぜひ紹介してください。新刊/新作である必要はありません。原稿はWordファイルで作成し、hi-shoji@juntendo.ac.jp さくらクォーター・レビュー編集部(庄子ひとみ研究室)宛に添付ファイルで送信してください。